

白山ふるさと文学賞

第九回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 最優秀賞

世界一の母へ

鳥越中学校三年

松永 まっなが

奈那 なな

もともと私の家族は、両親、祖母、兄二人、私の六人家族でした。しかし、私が小学三年生の頃に両親が離婚し、その時から私は母子家庭になりました。家族みんなで過ごす時間が大好きだった私にとって、本当にシヨックな出来事でした。起きていることを理解し、受け止めるには、とても長い時間が必要でした。精神的に辛く、友達に何か聞かれることも怖くなって、学校に行っても早退してしまうことがありました。でも、そんな時私を一番強く支えてくれたのは母でした。私が泣いていたら、「これからいい事絶対あるから頑張ろうね」「絶対幸せになるうね。」いつもそう言ってくれました。仕事で疲れていても、私の好きなものを買ってきてくれたり、行きたい所に連れて行ってくれたりしました。母の他にも、私をなくさめて助けてくれた人はたくさんいます。でも、正直、母の存在がなかったら今の私はいないと思います。母には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

それなのに私は日頃、感謝の気持ちが恥ずかしくてなかなか伝えられず、むしろ迷惑ばかりかけています。怒ってくれるのも母の愛情だとわかっているし、素直に受け入れないといけないというのわかっているけれど、そう簡単にできず、いつも「うん。」の一言で終わらせてしまいます。母の言葉にイライラしてしまうことも、反抗してしまうことも多々あります。その度に言い合いになって口数が減ってしまうこともあるけれど、次の日の朝、私が起きたときには、もう朝食が用意されています。それを当たり前のように感じてしまうけれど、よく考えると全然そうではなく、心から感謝すべきことなのだと思います。母は帰宅が遅くなる時は、夕食を作ってくれます。そして毎回、手紙が机の上に置いてあるのです。それは、「おはよう」から始まって「いってきます」でいつも終わっています。五行くらいの短い手紙だけれど、朝の忙しい時間を削って私のために書いてくれたのだと思うと本当に嬉しいし、心が温かくなります。

母が帰ってきて、一日の出来事を話す時間は本当に大切だし、私の時間がとても好きです。勉強やスマートフォンを使う時間で、一緒に会話をする時間が小学校の頃より減ったけれど、同じテレビを見て一緒に笑ったり話したりする時間だけはなくせないし、これからもずっと大切にしていきたいです。

両親に囲まれて幸せそうな家族を街で見かけたり、友達のそういった話を聞いたりすると、やっぱり「いいな」と思ってしまうこともあるし、悲しくなることも時々あります。でも、私は、今の生活がととても幸せです。母子家庭で大変なことはたくさんあるけれど、私は今、「幸せ」と胸を張っている事ができます。

私は毎年、母の誕生日と母の日に必ず手紙を書いて渡します。恥ずかしくて直接渡せず、テーブルの、母がいつも座る辺りに手紙を置いていきます。だから、私が書いた手紙を母が読んでいるところは、見たことがありません。でも、私の知らないところで読んでくれていて、後から「手紙ありがとう。」と言ってくれます。恥ずかしいけれど、やっぱりその一言が嬉しくて、また来年も書くと思うのです。そして、私が書いた手紙がどうなっているのか、私は知っています。母の部屋の小さな引き出しに大切に保管してくれているのです。それも、私が保育所の頃の、とても昔のものも全てです。下手な字で書いた手紙も、下手なイラストも、全部大切にしてくれているのです。また、冷蔵庫には、私の兄が母の日に贈った絵が貼ってあります。そういうものを見ると、本当に心の底から嬉しくて、心がぼかぼかになります。意識しないとわからないような愛情を、私はたくさんもらっているのだと気付くのです。

私の母はとても頑張り屋です。頑張り過ぎてよく無理をしてしまうことも私は知っています。だからこそ、私にできることは何かを考え、行動に移していきたいです。皿洗い、洗濯物たたみ、何かひとつするだけでも母の支えになれるなら、積極的に行きたいです。

まだ少し先の話だけれど、私は高校を卒業したら就職します。私の兄

二人もその道を選びました。就職の道に進む理由はただ一つ、家庭を支えるためです。そして、母を少しでも楽にさせてあげたいと思います。それまで、もしかするとそれからも、母にはまだ迷惑をかけてしまうかもしれません。でも、そのようなことはできるだけ減らして、次は私と二人の兄との三人で、母を世界一幸せな母にしてあげたいです。

